「時空を超えた明治学院との思い出」

米沢和一郎

私は、明学学生時代にとりつかれた書誌学を仕事に、その後他大学図書館司書勤務を経て、賀川豊彦資料館研究員として 15 年間勤務した。その間、賀川の仕事で、明治学院に幾度

か足を運ぶことを余儀なくされたのである。

そして今年、積年の賀川の取材成果をまとめる詰めの作業を、米国で開始しようとしていた。それが、どうしてまた明治学院に通うはめになったのか。それは、今春明治学院を定年になった K 教授との昨秋の話にある。K 教授が言うのは、積年の賀川取材の成果を、明治学院で発表してはどうか、とのことであった。もともと、海外は別にして、日本で賀川をやるのに、協力的なところは皆無であった。それを考えれば願ってもない機会であった。

それ故、欧米での収集資料の『賀川豊彦世界書誌』群データベース化作業を、日本で完全に終了させ、行動記録を含む幾つかの基本ツールを発表後、Collection としての資料整理の為の米国行きへと予定を変更したのである。これが明治学院へ、また通うはめになった経過である。こうした経過から、今後明治学院で行うことは、K 教授の現在の立場とも密接に関係する。しかしそれは賀川を、前職の顕彰の場とは異なる手法で、K 教授とは別の立場からの検証で光を当て直すことになるだろう。“忘れられた存在”となった感のある賀川に、今一度光を当てる決断をしたのである。

“賀川は神様になっちまった”（大宅壮一）賀川亡き後の NHK 放送でのこの言葉は、神様にされることに、生前無策であった賀川を言い当てている至言でもあろう。同様に、賀川を知るアカデミズムの碩学からの至言を、私の明学時代の思い出のなかから回記したい。

かつてまだ嘴の黄色い明学の学生だった頃、総合社会学の泰斗 S 教授に、賀川との大阪労働学校時代の関係を質問した後、教授の総合社会学体系に欠落している部門との関係はないのですか、と質問したことがある。その時それに対する答えはなかった。今考えてなんと向こう見ずなと思うが、その教授の眠る墓所には“偉大な真理は批判されることを欲し、偶像化されることを望まない”とあるという。

形式社会学の K 教授との思い出もある。講義のなかの、リーダーシップ論のときだった。“指導者というのは、精神的に慕われて後の真価にあるのであって、いわんや最初からグレートマンである必要はない”教授独特のレトリックで語った言葉は、今も私の脳裏にある。K 教授の師戸田貞三と、東大セッツルメントとの関係から、当時まだ全くわかっていなかった賀川と東大セッツルメントとの関係を聞いた、そのすぐ後の講義での言葉であった。K 教授の賀川観も、他同様に、当時私が想像していたより、はるかに低い評価だった。

米国で Social Worker、欧州で Social Reformer と呼称されていることを知った今。社会事業家としての働きが、影響受容はともかく、その割に研究が乏しいのはなぜかと、あの時聞いた相手は、職業指導の遊佐敏彦講師であった。

私の明学でのかけがえのない財産は、賀川という人物を、当時誰彼となく聞いてまわったこうした向こう見ずな記憶にある。同時にそれは、個人的な生い立ちから、賀川という名前を知った上で入学しながら、その後他大学で図書館学を受講し、卒業せず明学を去った。そうした若き日の思い出と重なる。そして歳月を経た遥かな旅路の果てに、また舞い戻った明治学院で、再び賀川豊彦の何を、どう伝えてゆくかに、取り組むことになったのだが！

（よねざわ　わいちろう　客員研究員）